

「底が突き抜けた」時代の歩き方 313

人間のクズでいいです - 映画『まぶだち』

「子供」の世界を当の子供自身はどうみているのだろう。たぶん子供にもよくわからないと思われる。というより、その世界の中に生きているから、わかる必要もないのである。子供たちは言葉を持たない存在であるが、その世界を言葉で表現しようとする欲求をもつことがあっても、もちろん、表現する言葉を持たない。言葉を持ってしまったら、その世界と訣別しなければならない。言葉を持たない代わりに子供は全身で自分の世界を敷き詰めようとするし、その世界に引っ込んだまま、いろんなところへ出かけようとする。ともあれ、「子供」の世界は身を剥がせない、無言が漂っている人間にとってのある成育期とみなせるかもしれない。

映画『まぶだち』は、そんな「子供」の世界から出て行こうとしながら、次に赴く世界が全くみえてこない「宙ぶらりん」の中学生の世界を描いている。年齢的にも思春期に差し掛かっているけれども、そこにはまだ異性への憧憬的な視線は萌していないし、彼ら自身も異性からの視線に耐えうるだけの男性的な輪郭をほとんどかたちづけていない。彼らの自分以外への関心は、“まぶだち”（親友に近い友達）に向かっている。成育期における自然段階としての同性愛的感情に包みこまれている自分自身から、まだ完全に分離されていない“まぶだち”、同士の3人と、そんな彼らにかかわってくる担任の小林を軸として、映画は特定の時代を超えた、言葉では捉えきれない“まぶだち”の世界をカメラで鮮やかに切り取っている。

長野県の飯山市と木島平村の長閑な田舎町を舞台とする古厩監督の『まぶだち』（00年）は、01年の第30回ロッテルダム国際映画祭でグランプリに当たるタイガーアワードと国際批評家連盟賞を受賞した作品である。キャストの3人の中学生は主人公のサダトモ以外は地元の中学生を起用し、素人同然の彼らの朴訥な演技が「どうしていいかわからなかった年頃」の気分をリアルに醸しだしている。

頭の回転が速く仲間からあこがれる強さと大人のような処世術ができるサダトモとテツヤ、周二の3人組は、生徒をクズと人間に分類する担任の小林から「人間にも満たないクズ」呼ばわりされながら、教室で監視され、家で生活記録を書かされる毎日を過ごしている。いつものようにサダトモたちは遊び半分で近所の駄菓子屋で万引きをし、そのことが学校に通報されて、小林はホームルームの時間に名乗り出るよう促すが、誰一人名乗り出ない。小林はサダトモたちを疑っているが、サダトモは平然とし、テツヤと周二は不安がる。翌日、小林は一番気の弱い周二から犯人を聞き出し、サダトモたち3

人の父親を学校へ呼びだすと共に、罰として各自原稿用紙30枚の反省文を書くように命じて、サダトモにいい放つ。「お前の言うこと書くこと全部嘘。……俺になんて理解してほしくないと思っている。俺はお前が大嫌いだ」

その晩、父親に初めて殴られてショックを受けたサダトモは、《僕はウソつきの玉ネギです。ノむいてもむいてもウソばかりで、全く中身がないのです。》と冒頭から記す反省文を提出する。すると、「先生の言うことを聞くのが優等生、反抗するのが不良、でもどちらも自我があるから、人間だ。お前はどっちでもないから、真ん中のクズだ」とサダトモにいていた小林は、サダトモの反省文に初めて彼の正直な告白を感じ取って、彼が人間への一步を踏みだしたと評価し、文化祭の意見文発表会でその反省文を読む荣誉を与えるといいだす。意見文とは何かを問い質し、それに答える学級委員に、「黙れ！ 建前主義者！……毎年俺たち大人に耳触りのいいことを良い子面で垂れ流すだけだ」と小林は一喝し、「そこらの偽善的な意見文の何倍も人間らしい」とサダトモを持ち上げ、「人間グラフ」と名づけられた白板のサダトモとテツヤの名札を、「クズ」から「優等生＝人間」へと移動させる。

しかし、都合よく「評価」を変える教師＝大人の身勝手さに嫌悪感を抱くサダトモは、「クズでいいです」と抵抗する。すると小林は、「反省文に綴ったのは自己嫌悪という感情だ。あれはな、卑怯なんだよ。……本当の自分は自分の非を認められる位マトモなのにとってんのと同じだ。本当のお前はいない。お前はそれを認めて少しずつ成長するんだ」とサダトモの心を見透かしたようなことをいう。嫌になった彼は反省文を通学路の橋の上から川に流してしまう。そのことを知った小林はサダトモを問い詰めるが、彼は風のせいで反省文が川の流れに飛ばされていったといい張る。

サダトモとテツヤの優等生への昇格から一人取り残された周二は、小林の「評価」を得ようとさまざまなことを試み、精一杯努力するが実らない。それでもいつものようにサダトモの後を追いつける周二にサダトモは焦立ちを覚え始め、テツヤはそんなサダトモへの憧憬と疎ましさを同時に募らせていく。そんなある日、小林からのノルマを達成できない周二は技術の授業中にノミで左手を刺し、救急車で病院に運ばれるという事件を起こす。ドジでノロマな周二とサダトモ、テツヤは以前のように放課後、橋の欄干を渡りながら帰途につく。ところが、サダトモが振り向いた瞬間、最後尾の周二は笑顔で川へヒョイと飛び下りる。

翌日、どしゃぶりの雨の中、多くの人出で行方不明になった周二の搜索が続行されている。雨合羽を着た小林が搜索現場のテントへ飛び込んできて、待機しているサダトモに問いかける。「本当のことをいってくれ。周二は自分で飛びこんだんじゃないのか」。しばらく間を置いてサダトモは答える。「野村君は足を滑らせました」「そうか……」といって小林は黙る。小林は報告されているような事故なんかではなく、周二の投身にほかならないことをひそかに察知していたのだ。彼はスパルタ教師にありがちな鈍感な男

ではなかった。だが、おそらく本当のことを知っているサダトモにそのことを確かめたかったのは、周二の自殺（だったとして）に対する内省からではなく、サダトモの口外を恐れたからだと思われる。とうとう「クズ」から「優等生＝人間」へと昇格することができなかった周二の死に、「人間グラフ」を貼り出すような小林が痛覚に襲われることなど到底考えられないからだ。小林がやがて校長になったとナレーションで語られていることも、その見方を裏付けているにちがいない。

だからといって、小林が典型的な管理教師として描かれているわけではないことが、この映画を凡庸な図式から剔^{てきしゅつ}出しているのだ。それは、小林に反撥するサダトモら3人組がけっしてヒーローなんぞではありえないことと、ちょうど見合っている。サダトモとテツヤが周二の投身自殺に憤りを感じて、周二を「クズ」扱いしつづけた小林を窮地に追い込むヒーロー的役割を演じることなく、周二の自殺を自分たちの目の前から笑顔でふっと消えてしまった事故死と同等の態度で受けとめているようにみえながら、その一方で周二のいなくなった現実を信じきれず、サダトモはその悲しみを周囲にぶつけ、テツヤらを困惑させる。川沿いの土手を歩きながら周二の遺体を探しつづけるサダトモとテツヤ。ひろったバリバリのエロ本を見るサダトモに対し、テツヤは真剣になれと怒る。二人は衝突するが、ラストはサダトモを嫌っていた筈のテツヤが、彼を尊敬していたと述懐する。

この映画は一体、なにを描いているのだろう。そこにどんなメッセージがこめられているのだろう。オランダの新聞「Daily Tiger」の記事（Maya Mckechneay）は、『画一化は死』と題して次のように批評している。

『まぶだち』は、子供から大人への成長を扱った映画である。そこで描かれているのは、大人になってからも記憶に残る、こうした時期の決定的な瞬間である。それらは、監督の実体験及び観察から生まれたものだ。

本作は、権威をふりかざす教師によって支配された日本のある学校の少年グループを取り巻く物語である。この大人の権力が最終的に目指すところは、子供たちが「個人」であることを阻止することである。少年達は、毎日の生活記録の中で、本心を吐露するように強制され、教師に「優等生＝人間」「くず」「不良＝人間」と評価されていく。この抑圧から逃れる道はない。中心的存在であるサダトモが見せる完全なる拒絶以外には。大人への旅立ちを扱うこの映画には、お決まりの「ファーストキス」のシーンはない。その代わり、大人への成長を、自分自身で選択する権利として描き出す。ストーリーのサブテキストとなっているのは、規制に満ちた社会メカニズムの分析である。権威主義的な社会に評価される子供は、自分の考えや感情を捨て去り、社会から期待される役回りを演じなければならない。主人公のサダトモが見せる初めは責任回避的であるが後に反抗的になるその生き様に、観客は共感を覚える。この映画は静かな仮面を被っているが、その下では、「画一化は死だ」と叫んでいるようである。》

いや、この記事のようにはとても「画一化は死だ」と叫んでいるとは思われない。この映画のよさは、周二が橋の欄干から飛び降りてふっと消えていきながら、「画一化は死だ」と叫んでいきそうにみえて、けっしてそっちには行かずに、子供と大人の間に挟まれた「宙ぶらりん」の「時期の決定的な瞬間」を描きだすことに体重を乗せているところにあるからだ。それはサダトモ、テツヤ、周二の３人組を描きながら、画一的な管理教育の最も餌食になりやすいウスノロの周二を中心に据えずに、また担任の小林に正面から刃向かうだけの成熟さを持たないテツヤではなく、子供でも大人でもない、というより、子供の気分も持ちながら、大人の御都合主義的な方便に見え隠れする真実と嘘の両方がみえている複雑な場所に身を置くサダトモを主人公に据えていることから明白である。

本当の主人公はサダトモであるよりも、彼が踏み入っているどっちつかずの微妙に揺らめいている世界であるといえるかもしれない。それは映画の最初の場面でくっきりと映しだされている。万引きをしてきた３人組が盗んできたボールを投げ合ってはしゃぎ始めるが、ボールが逸れてサダトモが拾いに行く。ボールを捜しだしたサダトモはすぐに彼らの所に戻らずに、小高い場所からバスの横で戯れている二人の姿をじっと見つめている。このシーンは特筆すべき描写にはみえないが、この映画にとっては主題が一目で浮かび上がってくる重要な場面である。つい先程まで一緒に万引きをして仔犬のようにじゃれ合っていたのに、一度その輪を外れるとサダトモはもう元に戻れなくなっているのだ。彼らの知らない世界に踏み込んでいるという意識が輪から外れたサダトモをすぐさま捕らえて、少し離れた場所から走り回る二人の姿を見ていると、どうしても彼らの所に近づけない自分自身を感じ取っている。

担任の小林については、映画『独立少年合唱団』の監督緒方明がパンフレットの中で次のように書いている。《特筆すべきは担任教師役の清水幹生だろう。こんな教師は今までどの日本映画も描いてこなかった。そこにはねじれてしまった戦後の画一的民主教育の有り様だけでなく、子供達とどう向き合えばいいのか、とまどったあげくの大人たちの姿までも映し出している。人間の価値観が多様化、複雑化していった７０年代以降に現れたいびつなカタチの教師像。不可解な規則と詭弁で子供達を煙に巻いていくこの教師は迷走する現代社会の象徴のようにも見える。古厩智之はそんな教師とサダトモが対峙するシーンを見事な緊張感で見せてくれる。「オレはお前を肯定している」「言っておくがこれは命令ではない」「お前は屑だ。だが評価に値する」哲学のような言葉を少年に投げかける中年の担任教師。たぶん彼は少年達をひどく畏れているのだろう。その姿は時に残酷なまでに哀れた。歪んだ学校生活の中、少年達は停滞せざるを得ない。》

よく考えれば、小林の「人間グラフ」はテストの点数で生徒の優劣を図っているわけではない。小林が「先生の言うことを聞くのが優等生、反抗するのが不良。でもどちらも自我があるから、人間だ。お前はどっちでもないから、真ん中のクズだ」というとき、

そこでの評価の基準が「自我がある」かないかであることがわかる。評価の基準が妥当かどうかを別にして、自我を持たない人間はクズだという見方はわからないでもない。それにこの教師は意見文について答える優等生の学級委員にむかって、「黙れ！建前主義者！……毎年俺たち大人に耳触りのいいことを良い子面で垂れ流すだけだ」と一喝して、「先生の言うことを聞く」振りをする優等生の偽善者ぶりをもちちゃんと見抜いている。

「黙れ！ 建前主義者！」という小林の一喝には、「戦後の画一的民主教育」の建前主義に対する憤りもこめられているのが感じられる。小林の「人間グラフ」はあまりに露骨にすぎるけれども、少なくとも表面は取って付けた民主主義の口当たりのいい台詞でお茶を濁しながら、裏面では狡猾に生徒を厳しく選別しているような教師よりはるかにましだ。小林がサダトモを嫌うのは、時に「大人」の視線で自分の「人間グラフ」の無意味さを見られているようなところが感じられるからであり、またサダトモを評価するのは、自分に媚びずに、自分の言っていることが彼に唯一理解されているように思われているからだ。

「クズだ」といわれるサダトモが小林に憎しみを持たないのは、自我を持たない人間はクズだという彼の主張をどこかで認めているからである。そしてサダトモが小林に反抗するのは、自我のあるなしを評価の基準として自分たちに押しつけてくるからである。反省文が評価されることも、評価されて「クズ」から「人間」へと昇格することも、サダトモは本当に嫌だったので、「クズでいいです」といい、反省文を風に飛ばして川に流してしまったのだ。この場面は、サダトモのように小林に評価されようとして精一杯努力しながら、とうとう「人間」に昇格できなかった周二が笑顔を浮かべて川にジャンプする後の場面と重なってみえてくる。自我の乏しい（それ故に小林は周二を「クズ」扱いしつづけた）周二は、自分自身を反省文として川に流していったのかもしれない。

反省文を貫くサダトモの自己嫌悪感を「卑怯」と見抜き、そこに「本当のお前はいない。お前はそれを認めて少しずつ成長するんだ」といったのける小林（たち大人）に最大に欠落しているのは、生徒を評価する彼自身が「人間グラフ」のどこに位置づけられているのか、という問題であった。彼の発している言葉はけっして理解できなくはないし、的を射ているようにも感じられるけれども、おそらくサダトモは小林が自分にむかって発する言葉のどこにも彼自身が存在していない胡散臭さをどこかで感じ取っていたにちがいない。生徒を「優等生、不良、クズ」の三種類に分けて評価を下す小林自身が、自らの下す評価から免れていることにおいて、裁判官にほかならなかった。彼もまた、自分を圏外に置く欺瞞を、しかも彼が毛嫌いする「建前主義者」の偽善を冒していたのだ。

《自分の時間を掴みきれずにいるのに「生活記録」を書かされ、他人に嫌われることを恐れながらも人とうまく付き合うことが出来ず、廊下では「お前は誰だ」と問われ、父

親はとまどい、言い訳をしながら殴る。少年の住む場所は緑に覆われた美しい土地だ。夏の日差しに満ちた風景がまぶしい。でも彼らにはその景色さえ目に入らない。ぼんやりと見えているのはよくわからない自分。好きなのか嫌いなのかわからぬ友人達。現実感を伴わぬ大人達の存在…。真綿で首をしめられるような日々が緩やかに続く。自分が見えてしまうことにおびえるサダトモは、心の痛みよりも画鋏で刺した手の痛みで生きることを感じようとする。更には自分のいやなところを忸怩たる思いでさらけ出し反省文に記したら、初めて親や教師に褒められた。この少年達は自らの恥部と目をそむけず向き合えないと大人たちに認められないということなのか。だとすればそれはあまりにも切なく痛々しい。一体「日本の大人」たちは何と向き合ってきたというのだ。家族か。組織か。社会か。経済か。それともアメリカか。現代社会においては大人たちの自覚無き罪が少年によって顕在化されているとしか思えない。この映画の少年達は今日の言葉でいえばすぐに「キレたり」しない者たちだ。だからこそその傷は深く静かに彼らの魂の淵を蝕んでいく。声に出せぬ少年達の孤高の叫び。それはやがて物語を悲劇へと導いていく…。》

緒方明の先の文章はこう続く。だがサダトモが最も絶望的な気分になるのは、自分の周囲には自分勝手に嫌な大人しかいないのに、そんな大人の世界へ自分がじょじょに追い上げられつつあるという実感であったにちがいない。たぶんサダトモはテツヤと周二に対して、とりわけ周二に対して、彼らの知っている以前の自分から遠ざかり、もはや彼らの元には戻れない自分が苛立ちながら相手をしていることを意識していた筈である。そうすると、周二の自殺がもし彼がサダトモから置いて行かれることをどこかで予感した拳句の行為であったとするなら、サダトモに彼の自殺の責任がなかったとはいえない。小林に問われたサダトモが周二は足を滑らせたと言ったとき、彼は小林を安心させたのではなく、自分を安心させたのかもしれない。ただその嘘によってサダトモは周二たちと完全に袂を分かったのである。

古厩智之監督は『キネマ旬報』（01年12月上旬号）で、中学生を描いたことについて、「あの年代は子供でも大人でもない、宙ぶらりんのところにいる。自分のやりたい話を描くには、この年代が一番適していると思ったんです。例えば、いつの時代に戻ってもいいということになっても、僕はこの時代に戻るのだけは嫌なんです。うざったいことがいっぱいあるし、何をやるにも友人や周りの目線が怖い。そこを描くことには、きっと価値があると思ったんです」と語っているが、この一番戻りたくない「嫌な」時代を潜り抜けて、大人の世界に向かうのに、（周二の自殺について嘘をつくという）最大の嘘が必要であったということかもしれない。つまり、辛い嘘をつかなければ、大人の世界へ入っていけないということを象徴していたのかもしれない。

2002年6月30日記

